編集後記

今回で２回目を迎えることになった国際日本語学シンポジウムは、おかげさまで去年にもまして、充実したものとなりました。第一回のシンポジウムも思いのほか反響が大きく、現在に至るまで報告書についての問い合せが引きも切らないといった具合ですが、今年は比較社会文化学からの参加もあって、内容も日本学独自のテーマだけでなく、西欧中世をテーマとした「中世の色と音」という新鮮な企画も実現し、新たな国際化の地平が獲得されましたので、その反響は更に広範なものになると期待されます。国際性にきりこむという点からいえば、「国際化のなかの日本語研究」のような、日本語研究を海外の視点から見なおそうという企画もありましたが、国際日本語学ならではの、従来の学問領域にとらわれない、斬新な企画として「日本の大衆文化」も好評を博しました。また、日本の政治の結節点を対象とした「『維新』の思想」、回想録という特異な分野に光をあてた「記憶のエクリチュール」は、海外の日本学研究者を迎え、日本の歴史的問題が国際的視点からも検討されるという、国際日本学の本領ともいうべきシンポジウムとなったといえましょう。

また、公開講演会では、海外で日本学を研究することの困難、およびその意味についての、貴重なお話しがあり、国際日本学という視点そのものを深めることができましたが、国際日本学という舟のまだ出航してから浅いがゆえの困難、それが特に海外における研究者に大きな負担となっていることを知り、それをどう支援していくかが真剣に模索されなければならない課題であることが知られたことは大きな成果であったと思われます。

全体会議「ネットワーク日本研究」での各国の研究者からの発言は、こうした海外で日本研究を行なう際の困難が、奈辺にあるかを明らかにしただけでなく、そうした各国ごとの状況の異質性は、日本人研究者である我々に新たな問題をつきつけるものとなりました。

以上大変に稔りの大きいシンポジウムを、成功裡に終えることができましたのは、ひとえに研究発表者、御講演者、発題者の皆様の御尽力によることはもちろんでありますが、フロアーからそれを熱心に聞いて下さり、また御質問を下さった御参加者全員のお力によるものであることは間違いありません。また、それと同時に忘れてはならないのは、このシンポジウムを１年も前から準備して下さった各分科会の責任者の先生方、また当日は自分の聞きたい分科会の参加も断念して進行を蔭で支えて下さった、多くの本学人間文化研究科の助手、院生の方々の並々でない献身であります。ここで、いちいちお名前をあげることはできませんが、記して謝意を表したいと思います。ただ、シンポジウム終了後も半年以上にわたって、この報告書の作成に努力してくださった、人間文化研究科助手、石橋玲子さん、および事務補佐員、清水淑子さんには、このお二人の御尽力がなかったらこの報告書の完成はありえなかったという意味で、特にお礼を申しあげたいと思います。なお、最後になりましたが、経済的な面で本シンポジウムを支えて下さった、伊藤謝恩育英財団、およびサントリー音楽財団にも御支援のお礼を申し上げたいと思います。

（鈴木泰　記）